

との間に深い溝が存在した点を重視し、「名誉」と生業を原理とする「古き手工業」に対象が限定される。たとえば、ツンフト権限の制限や職人裁判権の廃止などを規定した1931年の帝国手工業法令は、『古き手工業』の悪弊が強固に存在していることを逆に示すものであった。

「二 手工業の名誉」では、手工業の「名誉」を明らかにするために、「名誉」をもたない人々の起源に関する諸説が検討され、著者の独自の見解がだされる。まず、古代以来の奴隷制に起源を求めることになるメーザーの賤民論に対しては、かつて奴隷労働としてさげすまれた手工業が、市民の営業として新たな社会的評価を獲得した点から批判される。さらにダンケルトの賤民論に対しては、ドイツでは逆にこの時期から「不名誉な」職業に対する差別が強化されたのはなぜかという問題を、「キリスト教以前の異教的聖性への畏怖と呪術的タブーで説明することは不可能である」と批判する。そして、著者は、手工業者による賤民差別は「共同体の周縁分子に対する市民の身分制的な『貴賤』観念に基づく差別として制度化された」と結論づける。そして、共同体に依存し共同体員に奉仕する従属的労働ではなく、自分の力によって独立の職業を営むことが「古き手工業」の「名誉」の最大の特徴であるとされる。

「三 『生業』としての手工業」では、「需要充足原理」にもとづく「生業」すなわち「身分相応の生計」をめざす「古き手工業」において、ツンフトの「生業政策」が外来職人の親方への昇進の機会を奪った点が明らかにされる。ミュンスターの場合、富裕な手工業では「全き家」とみなされツンフト外部からの参入率も低いが、「大衆の手工業」になればなるほど親方昇格の機会が開かれ、「半開放的な」世帯であるとの相反する傾向がみられるのである。確かに外来職人の親方になる可能性は都市によって大きく異なるものの、総じて「一人親方」の多い手工業下層業種を別とすれば、殆どの職人は高額の親方資格や市民権の取得料の準備ではなく老齢まで雇用労働で生計を立てねばならなかったのであり、徒弟・職人がライフサイクルの青年期にのみ限られた住み込み使用人であったという「ライフサイクル・サーヴァント」論の有効性が疑問視される。

「四 徒弟から職人へ」では、職人の手工業親方からの独立性が強調される。「エリート徒弟」と「普通徒弟」の対比はあるにせよ、職人は徒弟や奉公人と事実上同じ地位にあり、家父長的支配を受けなければ

藤 田 幸 一 郎

『手工業の名誉と遍歴職人』

—近代ドイツの職人世界—

未来社 1994.4 xxxxi+279 ページ

著者は『近代ドイツ農村社会経済史』、『都市と市民社会』について本書においても独自の新たな世界をきりひらいた。最初に本書の内容を紹介している。

「一 『古き手工業』では、「手工業的伝統を語ることなしにドイツの労働者を語ることは不可能でさえあるという歴史認識」から手工業の職人の問題が注目を集めている最近の研究動向が概観され、「18世紀の職人組合の多くは官憲とツンフトの弾圧によって最終的に解体に追い込まれざるをえなかった」のはなぜかという問題関心から、「とくに18世紀から19世紀初期の『古き手工業』における職人の地位、ツンフト親方と職人との関係、職人固有の社会関係などをとりあげ、職人組織の解体にいたる過程を追ってみたい」と研究課題が設定される。そして、「古き手工業」と同時に建設業やニードーラインの繊維・金属工業における「新しき手工業」の二類型が検出される。しかし、イギリスとは対照的に、ツンフト・身分制的伝統が強固に存続し、親方と職人

ばならなかった。だが、職人は徒弟などのように家父長的「全き家」に包摂・従属しているという見解は批判され、職人の自立性にとって職人組合加入儀礼のもつ意味が強調される。そして、儀礼の中にツunftや英仏の職人組合とは対象的にキリスト教の影響がみられない点が重視され、遍歴こそ「職人の名誉」の核心をなしたと結論づけられる。

「五 遍歴と職人組合」では、フランスで職人の遍歴が限られていたのに対し、ドイツでは殆どの地域・職種で遍歴強制が導入され、16～17世紀には手工業の不可欠の要素になっていた点がまず指摘される。それは、15～16世紀以降手工業ツunftが閉鎖性を強め職人を追放したためであり、18世紀末期の遍歴の増加はツunft強制から「営業の自由」へ向けてのドイツ手工業の転換期を象徴するものであった。また遍歴行程の分析から、ドイツの北部と南部は相対的に独立の遍歴圏を形成しており、また「新しい手工業」が発展していたニーダーラインだけは遍歴の真空地帯をなしていた点が明らかにされる。

まさに「古き手工業」、遍歴強制、職人組合は不可分の相互関係を構成しており、職人組合が遍歴職人の斡旋権および病気に対する援助を中心的な課題として、手工業アムトの承認を必要としながらも、慣習に基づく権利として裁判権を行使していた限りで「非公式の職人身分団体」とみなされる。

「六 職人蜂起」では、職人と親方との共同関係を重視する通説を批判し、両者の対立的関係を強調する視角から18世紀のオスナブリュックの職人蜂起が分析される。60年代と90年代の不況期に経済闘争も頻発したが、特に注目されるのが職人的「名誉」を守る闘争、さらに職人組合の自治権獲得競争で、闘争の矛先は非ツunft手工業的不熟練工の排除に向けられていたのである。そして職人の「名誉」は、形式的なツunftへの帰属性よりも、職人組合の一員としての強い自覚と連帯意識に依存するのであり、職人を「平民的諸階層の相対的に独立した部分」とみるブロイアーの見解を支持する。

そして職人蜂起は90年代に絶頂に達し、一職人組合の枠を越えて、複数の組合あるいは他の都市下層民を巻き込み都市から都市へと波及していき、領邦国家とその軍隊の介入による流血の大惨事となり、領邦国家と帝国都市は職人組合を解体していくのであった。

「七 一九世紀初期の職人」では、オスナブリュックの事例や1827年の「ペルリン手工業調査」が分析

される。「営業の自由」のもとで非ツunft親方や下請け生産が出現し、それにつれて職人の世界も大きく変容していく。職人がツunft外の職種でも働くことが可能になり、大半の職種で既婚職人が存在し、未婚職人での職任分離がみられるようになった。さらに職人組合に対する禁圧体制は強化され、職人宿を拠点とする職人組合の職人斡旋権、手工業労働市場規制権は否定されていき、職人組合加入儀礼も殆ど廃止されていった。それにもかかわらず、遍歴強制の存続と遍歴職人の低い就職率から、職人宿が職業仲介と懇親の場の機能を維持し、職人金庫が職人互助組織として存続した点に注目し、「相互に助け合う仲間としての連帯感をもちえ、集会を職人の集団的意志形成の機会とする可能性ももっていた」点が強調される。

以上の概観からうかがえるように、内外の研究成果を網羅し、最新の研究動向も視野に入れたうえで、ドイツでのアルヒーフ・アルバイトから独自の近代ドイツの手工業像を提示した本書の研究水準はきわめて高い。そして、経済史に「社会史」的視点を導入しようとする「経済社会史」的分析視角も、なぜ社会経済史ではなく、「経済社会史」なのかという方法的精緻化を今後期待するとしても、本書をより魅力的なものにしている。また、近代的経済発展との関連で職人の自立性を強調する本書は、明快な論理によって導かれ説得力にとみ、手工業研究だけでなく、ドイツ社会経済史研究でも今後座右の書として大きな意味を持つようになるであろう。

重厚な本書に対し大きな疑義はないが、いくつか疑問・感想を述べてみたい。第一は、本書の研究対象である「古き手工業」に関してである。「ほとんどもっぱら都市周辺の局地的需要に向けて生産する伝統的な職種」と「古き手工業」を定義し、「新しき手工業」と対比させている。だが、「古き手工業」の中でも仕立て、靴製造・修理などの「大衆手工業」とパン屋・肉屋とは大きな相違が存在するが、それを「古き手工業」として一括することが可能だろうか。本書では、一方で職人蜂起の分析やクリージンガーの「象徴資本」説や「全き家」論の批判の場合に、「大衆」手工業に基づいて「古き手工業」の性格づけがなされる。だが、他方でツunftの「生業政策」は「大衆手工業」で「それほど大きな力を発揮しなかった」が、パン屋・肉屋の場合を重視し、「全体としては、『古き手工業』の『生業』理念は保持され」たとしている。このように「古き手工業」

の概念は必ずしも統一的・整合的とは言えない。F. レンガーも指摘するように「古き手工業」を見直し、むしろ三つの類型から分析した方が有効ではないか。

第二は、本書の結論に関してである。職人の「名誉」は、類型ごとにその内容が異なっているのではないか。20世紀になっても多くの職種の職人のなかに自営への憧れが強固に存続しており、まして当時の職人にとっては「自営」という「古き手工業」の名誉はかなり大きな意味を持っていたと考えられる。遍歴も定住して自営するための一つのステップとしてみなされていたのではないか。また、職人組合は手工業ツunftとともに地域の公的機会や聖俗の祭りで中心的な役割を担っており、地域共同体にあっては手工業の一員としての名誉が職人にとっても重要となってくるのではないだろうか。本書で強調される職人より下層の部分に対する名誉だけでなく、地域共同体では、彼らよりも上層の市民層に対しても名誉が主張されているのであろう。職人と親方の共同関係により注目し、職人の権利・自立性にも一定の留保をつけるべきではないか。労働市場の規制権など親方も認めざるをえないという状況は本書でも指摘されている。また、18世紀後半の職人の就職率の低下を雇用職人の回転率の減少に基づく遍歴頻度の増加に起因させているが、回転率の減少はどのように生まれたのか。その点についての言及はないが、職人の労働市場規制権が親方の雇用安定化の要求の前に無力化しているとも考えられる。いずれにせよ手工業内での利害の一致(共同性)と対立(階級性)という複眼的な視角が必要なのではないか。また、職人組合の解体はなぜかという本書冒頭の問題関心に対し、明確な解答は提示されておらず、むしろ職人宿や職人金庫を媒介とした職人の連帯の存続が強調されている結語部分は、本書全体の論理構成にとって若干の曖昧さを残したように思われる。最後に、職人世界の自立性をイギリスと比較して「ツunft、身分制的伝統が強く根付いて長く生き残り」といういわばドイツの後進性に求めているが、本書でも視野に含まれた新たな研究動向をもっとポジティブに取り入れるなら後進性とは違った議論も可能になるのではないだろうか。たとえば、本書でもトムソンの「モラル・エコノミー」が食料蜂起に関して引用されているが、友部謙一氏の『思想』論文やリンデンベルガーらの紹介論文で指摘されているように、日常生活の中の「生活(慣習)装置」としてより広い視野を持つものとして「モラル・エコノ

ミー」が議論されており、その点をドイツ史研究でも視野に含む必要があろう。

[鎗田英三]